

■ 目先ドル/円は上げ一服!? 欧州通貨の行方に要注目

謹んで新春のお慶びを申し上げます。本年も引き続きよろしくお願ひ致します。

新しい年を迎え、のっけからドル/円、クロス円が大きく値を上げていることに少々驚かれた向きも少なくないだろう。既知のとおり、ドル/円は一気に116円台に乗せる動きとなり、クロス円も全般に強めの基調を続けている。ことにドル/円の動きが目立っていることを考えれば、ドル高と円安が同時進行するなかで、より「ドル高」の方が勝っている状況と捉えることができる。

昨年末(12/30)更新分の本欄で「年明け1月5日には、12月開催分の米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録が公開されることとなり、その内容に関心を寄せる市場関係者も少なくない」と述べておいたが、案の定、昨日(5日)公表されたFOMC議事録の内容は市場にとって「予想以上にタカ派寄りだった」ということになる。

議事録には、早期の米利上げの可能性をより強く示す文言が見られたうえ、利上げ開始後の比較的早い時期に「バランスシートの規模を縮小し始めることが適切になり得ると、一部の参加者が留意した」との記述もあった。

それは、ある意味で想定内のことでもあった。考えてみると、昨秋の「テーパリング開始」前までの資産購入策は、あくまでパンデミックの影響に対処するための緊急かつ極めて例外的な措置であったわけであるから、事態が収束に向かえば直ちに幕を引くのが当然であるとも言える。パンデミック後の当局の対応が迅速かつ大胆であっただけに、その幕引きが迅速かつ大胆に行われても不思議ではない。言うなれば、パンデミック前の状態に戻すだけということになる。少なくとも、過去の「景気後退局面からの脱却時」に経験した金融政策の正常化パターンとは全く異なるものであると認識しておくことが肝心となる。

また、オミクロン株の感染拡大に対する人々の捉え方も、欧米人と一般的な日本人とではだいぶ異なるようである。どうやら、欧米の人々の方が「重症化リスクは低い」とされるオミクロン株の感染拡大に対してはかなり楽観的であるようだ。

まして、今年が米中間選挙の年にあたる。市場関係者らの年頭所感を拝聴していると、今回の選挙では民主党が議席数を大きく減らす可能性が高く、それが見逃せないリスクの一つと指摘する向きが多い。しかるに、バイデン政権としてはインフレ高進の抑制に総力を挙げて取り組む姿勢を国民に示すことが何より重要となる。

とまれ、足元では米10年債利回りが再び1.70%台をうかがう動きとなっており、市場参加者も安易にドルを売り仕掛けることには慎重にならざるを得ない。

ドル/円に関しては、今週4日に昨年11月高値=115.52円処を上抜けたところから一気にストップロス巻き込む動きが生じたことで上げが加速した面もあり、目先はやや過熱感が強いことも事実である。日足の一目均衡表では「三役好転」のパターンが示現しており、基本的に強気の基調は継続すると見られるが、このあたりで一旦は利益確定しておくのも一手となる。

とはいえ、ここにきてユーロ/ドルやポンド/ドルのリバウンドがそろそろ一服しそうな気配であることもまた事実である。ことに、昨日はポンド/ドルが1.36ドル処まで上値を伸ばす動きとなり、市場の英中銀による追加利上げ期待をだいぶ織り込んだとの感もある。さしあたり、現在1.3571ドル処にある週足の基準線が上値抵抗として機能するかどうかを確認したい。

その意味では、少々きつい下げが続いてきたユーロ/ポンドがそろそろ下げ止まるかどうかという点にも要注目である。ポンド買いへの市場の関心が一服すると、あらためてドル買いへの関心が強まる可能性もあるが、結果的にクロス円の上値が重くなるとドル/円は短期的にも動きにくい状況に置かれる可能性があると見る。

(01月06日 10:10)